明治の人間

小島政二郎

明治の人間

小島政二郎

鶴書房

明治の人間／検印紙

明治の人間奥付

著者小島政二郎（こじままさじろう）

昭和四十一年九月二十日第一刷発行

発行者田中博之

発行所株式会社鶴書房

東京都千代田区富士見二丁目二番五号

電話(265)四七八二（代表）・振替東京一四五三番

本文印刷者堀内文治郎

活版口絵印刷者市村時春

製本者藤沢チヨ

製函者佐藤浅次郎

定価四百八拾円

（堀内印刷・市村原色印刷・藤沢製本・佐藤製函）

乱丁・落丁の場合は本社または書店にてお取り替えいたします。

明治の人間

小島政二郎

鶴書房　四八〇円

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

明治の人間／検印紙

明治の人間奥付

著者 小島政二郎

昭和四十一年九月二十日第一刷発行

発行者田中博之

発行所株式会社鶴書房

東京都千代田区富士見二丁目二番五号

電話(264)四七八二(代表)・振替東京四五三二番

本文印刷者堀内文治郎

活版口絵印刷者市村時春

製本者藤沢チヨ

製函者佐藤浅次郎

定価四百八拾円

(堀内印刷・市村原色印刷・藤沢製本・佐藤製函)

乱丁・落丁の場合は本社または書店にてお取り替えいたします。

明治の人間

小島政二郎

鶴書房

目次

明治の人間　11
名人面（つら）　43
隣の椅子　61
永井荷風先生　77
ああ、魯山人先生　81
村松梢風　85
圓朝　93
頼朝像　97
悟れない話　103

即身成仏 109
地獄極楽 113
陰(かげ)の舞(まい) 125
酒が飲みたい 139
鼻の話 145
雪の来る前の空 151
関門海峡 157
東京の町々 169
天才の芽(め) 177

「花屋日記」を懐にして　189
女の肌（はだ）　223
女の肌（はだ）三代　227
名人列傳　231
妻税（つまぜい）　255
余計なこと　276
発表誌　278
頼朝像口絵　101
「花屋日記」を懐にして口絵　199

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

明治の人間

明治の人間

一

一生忘れられない元日――

それは日露戦争の時、元日の朝、待ちに待った旅順港が陥落した日の感激だ。

その日は朝から寒い風が吹いて、チラチラ雪が舞っていた。その中を、腰の鈴を鳴らしながら旅順陥落の号外が配られた。

静かだった町内が、俄かに沸き立った。私の父は、十畳敷きぐらいの大きな国旗を火事師に持たせて、上野広小路の国旗掲揚場へ傘もささずに飛び出して行った。

その頃、広小路には三つ橋が掛かっていた。真中の大きな橋の上を電車が通り、左右の小さな橋の上にぶっ違いに組んだ旗竿が高々と聳えていた。

雪と風のしまく中で、二ヲ流れの国旗を綱に結ぶのは容易な業でなかった。

やっと結ぶことが出来てからも、それを風に逆らって竿一杯に引き上げるのが大変だった。子供の私まで力を貸して、キリキリ、キリキリと引き上げた。

とうとう雪の空高く、パシャッ、パシャッと音を立てて大国旗が見事一杯に翻えった時の

感激はいまだに忘れられない。

それにつれて思い起すのは、旅順包囲軍の乃木大将の苦戦の事どもだ。

これは慶応義塾の幹事を長年勤めていろいろ功績のあった石田新太郎さんから聞いた話だ。石田さんは、当時無きに等しかった文科の刷新を企てて、森鷗外、上田敏を顧問に、永井荷風をフランス文学の教授に招聘し、「三田文学」を創刊された人だ。日露戦争後、兒玉源太郎大将が台湾総督に任命された時、教育の方の一番上の地位に抜擢されて赴任している間に、兒玉さんが十回にわたって日露戦争の秘話を語られた。

その中の一回に、今日は一切筆記してはならんという前置きをして、乃木大将のことを話された。乃木さんと兒玉さんとは、同郷でもあり、大変親しかった。

日露戦争の時、参謀総長として縦横にその手腕を揮われたくらいだから、若い時から目から鼻へ抜けるような秀才で、いつの演習にも、乃木さんは勝てたことがなかった。それで、常敗将校の乃木さんをからかった軍歌を作って、兒玉さんはいつも唄っていたそうだ。

その軍歌は、「希典(気転)の利かぬ乃木つねを、七分兒玉で打ち上げた」というのだった。

ところで、話は第三軍の旅順包囲戦になるのだが、幾ら立っても陥落しない。陸軍でも海軍でもジリジリして待っていた。

旅順を見た人は知っているだろう、あそこはなだらかな低い山が広く港を取り巻いていて、山の上で守っている方からは、攻め手の動きが手に取るように見える。素人が考えても、攻

めにくそうなところだ。その上、敵は日本軍の夢にも知らない機関銃を持っていた。こっちは、櫻井忠温中佐が書いているように「肉弾」しか得物がない。が、幾ら肉弾を注ぎ込んでも、機関銃で手もなく掃射されて全滅してしまう。

一方、ロシアは旅順港に集結していた東洋艦隊が殆んど全滅されてしまったので、新たにバルチック艦隊を旅順に持って来ようとしていた。いや、もう基地を出発して、日に日に近付きつつあったのだ。

もしこれに旅順港にはいられてしまっては、日本は海の自由を奪われるし、輸送の危険にもさらされるし、一番苦手の戦争が長引く恐れもあった。

どうしてもバルチック艦隊を旅順に入れないようにしなければならない。それにはバルチック艦隊が来る前に、旅順を落してわが手に収めてしまわなければならない。

乃木、まだか、まだか、と、陸軍も海軍も待ちに待っている。山縣元帥などは、旅順が落ちた夢を見たという和歌を作って戦地の乃木将軍へ送ったりした。

二

国民は知らなかったが、軍の首脳部は、旅順が先か、バルチック艦隊が先かと、憂慮していた。明石少将はスパイとなって、バルチック艦隊の動静を探りに敵国に潜入していると伝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com